JAPANESE A1 – HIGHER LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A1 – NIVEAU SUPÉRIEUR – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A1 – NIVEL SUPERIOR – PRUEBA 1

Tuesday 21 May 2002 (afternoon)
Mardi 21 mai 2002 (après-midi)
Martes 21 de mayo de 2002 (tarde)

2 hours / 2 heures / 2 horas

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a commentary on one passage only.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- Ne pas ouvrir cette épreuve avant d'y être autorisé.
- Rédiger un commentaire sur un seul des passages.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario sobre un solo fragmento.

次の１（ａ）の文章と（ｂ）の詩のうち、どちらか１つを選んで解説しなさい。
（コメンタリーを書きなさい。）

１（ａ）

中国には怪異を語る書物の歴史がある。神仙、妖怪、夢の知らせ、この世とあの世を行ったり来たりする幽鬼たち。六朝時代（二二〇～五八九年）に生まれた「志怪」以来、数知れない文人がこのような話題に才筆を振るった。清代初めの作品『聊斎志異』は、その集大成といわれる短編の小説集である。

中国の怪を記す書の中では、動物や植物がしばしば人間に姿を変え、異性と性的な関係を結ぶ。「異類通婚」という主題の変遷をたどりながら、『聊斎志異』の新たな創造を考えてみよう。六朝の志怪は、多くの短い話からなる書物の総称である。そこでは犬、鼠、豚、虎、鶴、みみず、雑草など様々な異類が恐るべき誘惑者に変身する。後世のこの種の話の主役である狐の活躍はむしろ少ない。事の経過は、「①異類から近づき、人間を誘う。②結ばれる。③正体が露見して異類が去る、あるいは異類が殺される」。

志怪の中の誘惑者には、優しい仕草も、巧みな言葉遣いも必要ない。人間は抵抗するすべもなく惑わされ、時には発狂し命を落とす。志怪は当時、歴史書の一つと考えられていた。これは恋物語ではなく、異類に襲われた被害の記録であった。

唐代の半ば「伝奇」と呼ばれる物語が生まれた。その中で異類との通婚は次のようなものとなる。「鄭六という男は街で美しい女性を見掛け、邸までついて行って契りを交わした。その女性任氏は鄭六を愛し、貧しい男のために術を使い、大金を手に入れてやった。一年後旅に出たところ、任氏は猟犬に襲われ、狐の正体を現して殺された」（「任氏伝」）。

人間の男性は、異類の美女との恋愛を楽しみ、その死を見届けるものくと変貌をとげている。志怪と伝奇を分けたのは、怪異に対する認識の差であった。唐代の人々は、もはや異類の変身を信じてはいない。だが不思議な話には心が引かれる。そこで空想の物語を作って楽しむのである。

唐代以後、この種の話は次のように展開する。「①男が美しい女性を見初める。②障害を乗り越えて結ばれる。③ある事件から女の正体が知れる。④女が去る、あるいは殺される」。かつて異類に襲われていた人間は、自分の身を守るため、懸命に異類を排除した。いまや人間は異類を恐れず、理想の美女の役割を与え、自ら進んで近づいていく。だが結末は以前と同じ。人間世界に異類が長く留まっていることは許されない。

30　異類を人間より劣ったもの、汚れたものとする見方は、時代が下るに随い、次第に強固なものとなった。『聊斎志異』が生まれたのは、人と異類のこのような関係が長く続いた後だった。『聊斎志異』は全部で約五百編、中でも愛読されたのは、狐、蜂、牡丹、蓮の花などの化身をヒロインとするものである。大筋は唐代以来変わらぬ物語の中で、注目すべき変化は結末にあった。

35　大団円で終わるもの、つまり男性は女性が異類であると知りつつ、末永く幸せに暮らしたという物語が初めて出現したのである。別離で終わる場合でも、異類は決して追い払われたわけではない。彼女らはこせこせした人間の世界を嫌って去っていく。異類と知りつつ引き止めるのも人間、去られて悲しむのも人間であった。

40　異類と人間の関係は、この作品の中で再び逆転した。情愛深く聡明で、よく笑いよく戯れる異類の女性たち、人間としての価値はすべて異類の側にあり、人間はただ謙虚に彼女らを愛することによって、忘れていた自由を取り戻す。『聊斎志異』は古い歴史に縛られたキャラクター・異類を再生することによって、人間自身をも再生したのである。

（戸倉英美『世界の文学』朝日百科、二〇〇一）

（注）

戸倉英美（一九四九～）東京大学教授（中国文学）、著書に『詩人たちの時空』（平凡社）、『中国幻想小説傑作集』（「聊斎志異」戸倉英美訳）などがある。

『聊斎志異』一六八〇年頃成立。蒲松齢作。聊斎は、作者の書斎の意。志異は、異を志す（しるす）の意。

大団円（だいだんえん）　クライマックス。

1（b）

雨

春はすべての重たい窓に街の影をうつす。
街に雨はふりやまず、
われわれの死のやがてくるあたりも煙っている。
丘のうえの共同墓地。
墓はわれわれ一人ずつの目の底まで十字架を焼きつけ、
われわれの快楽を量りつくそうとする。
雨が墓地と窓のあいだに、
ゼラニウムの飾られた小さな街をぼかす。
車輪のまわる音はしずかな雨のなかに、
雨はきしる車輪のなかに消える。
われわれは墓地をながめ、
死のかすれたよび声を石のしたにもとめる。
すべては底にあり、すべての喜びと苦しみはたちまちわれわれをそこに繋ぐ
丘のうえの共同墓地。
煉瓦(れんが)づくりのパン焼き工場から、
われわれの屈辱のために焦げ臭い匂いがながれ
街をやすらかな幻影でみたす。
幻影はわれわれに何をあたえるのか。
何によって、
何のために管のごとき存在であるのか。
橋のしたのブロンドのながれ、
すべてはながれ、
われわれの腸に死はながれる。
午前十一時。
雨はきしる車輪のなかに、
車輪のまわる音はしずかな雨のなかに消える。
街に雨はふりやまず、
われわれは重たいガラスのうしろにいて、
春の冷酷な咽喉をさがす。

（北村太郎「雨」）

（注）
北村太郎　（一九二二～　）詩人。「荒地」同人。「北村太郎詩集」「犬の時代」など多くの詩集がある。